

農政改革特命チーム第11回会合

平成21年4月22日（水）

農 林 水 産 省

午後4時59分開会

○針原チーム長 定刻となりましたので、ただいまから農政改革特命チーム第11回会合を開催いたします。

本日はご多用中にもかかわらずお集まりいただきましてありがとうございます。

なお、大泉先生、中村先生は所用により欠席となっております。

また、経済産業省の石黒審議官は国会対応で欠席となりますが、代理として地域経済産業政策課の横島さんが出席されております。ご紹介いたします。

また、総務省の鈴木さんは所用のために遅れてお見えになるということでございます。

本日は、先週開かれました農政改革関係閣僚会合の決定を受けて、今後の検討の進め方について打ち合わせたいと思います。

また、農林水産省におきまして経済分析チームが作られているわけですが、そのチームが米政策に関するシミュレーションを行って、その結果が取りまとめられたということでございますので、その説明を受けて議論を行いたいと考えております。よろしく願いいたします。

本日の会合、午後6時半ぐらいまでを予定しております。ご協力下さい。

カメラ撮影はこれからはお控え下さい。よろしくお願いいたします。

まず、今後の作業の進め方でございますが、お手元の資料1、チームのメンバーの皆様には出席いただいたわけですが、先週金曜日に農政改革関係閣僚会合が開かれ、農政改革の検討方向が決定されました。このチームの取りまとめをそのまま決定していただいたということでございますが、次の我々に与えられた使命というのは、この検討方向に沿って政策を構成する項目ごとに具体的な内容を詰めて、夏をめどに農政改革の基本方向について中間的に取りまとめを行う。それを閣僚会合に報告するということが次のタスクといたしますか、使命になるわけでございます。

そこで、私からの提案でございますが、資料2にございますように、本日の会合の後、農水省において、場合によっては関連する省庁も含めて、各項目ごとに内容を検討していただく時間を、検討期間を見るということで、しばらくの間このチーム会合を中断いたしまして、6月の上・中旬、これは農水省における作業の状況も勘案しながらでございますが、6月の上・中旬に再開いたしまして、農林水産省を中心に各項目について順次説明を聴取した上で、8月上・中旬に一定の方向性を整理していきたいと考えております。そういうような進め方にしたいと思っておりますが、まず、本日はこの点についてご意見をお聞かせいただければと思います。ご意見といってもこんな単純なことなんで、特になければ

ば次に進めたいと思いますが、よろしいですか。

○迫田財務省主計局総務課長 各項目ごとというのは、この検討方向に提示されている各項目ごとということでしょうか。

○針原チーム長 私が今言ったのは、農政改革の検討方向で、検討事項と検討の方向を洗い出したわけですので、各項目というのはこれを想定しておりますが、ただやはり実践論として最初に各論から入ると議論もできないだろうと思いますので、はじめは総論的な部分、それから各論的な検討ということは少しは考えなければいけないのかなと思っております。それは6月以降の進め方の実践論で処理していきたいと思っております。

よろしいでしょうか。じゃ、そういうことで、このように進めさせていただきたいと思っております。

本日の議題の2番目でございますが、米に関するシミュレーションでございます。

これは、第9回の会合において過去のシミュレーションの例をご紹介させていただきました。その際には、今回の検討の過程でもシミュレーションを行って議論すべきという意見があったかと存じます。それを踏まえて検討方向をまとめたわけでございますが、今回はその1次的なシミュレーションがまとまったということでございます。まとめた主体と申しますのは、ここでございますように、資料3のクレジットは農林水産省大臣官房政策課経済分析チームとなっております。

この経済分析チームにつきまして私からご紹介いたしますと、この資料の一番最後の22ページ、一番おしまいページをご覧くださいと、もともとこのシミュレーションを行うだけのためにチームを作ったわけではございません。既に2月10日には来年の3月まで策定期間を予定しております食料・農業・農村基本計画の新しい計画の策定に際しまして、いくつかの経済分析を行いながら国民的な議論を行う必要があるかと思ひまして、例えば大臣官房の政策課だけではなくて、農水省の各担当に散らばっております専門家、経済分析に関する知識を有する人、あるいは政策研究所で研究を行っておられる方を併任を掛けましてチームを構成したわけでございます。

このシミュレーション以外に、価格需給動向というのがこのシミュレーションなんですけれども、政策の便益分析をしたり、それから先進事例を収集したり、いろんなことをやっていきたいと思っているわけでございます。この結果につきましては、必要に応じてこのチームにもご報告させていただきたいと思っております。

この経済分析チームの中で、この米政策シミュレーション担当というのがこの7名の方でございます。本日はこの中から平形参事官と木村企画官に席についていただいております。

す。本日はこのお二方から資料3についてまずは説明を聞いた上で質疑を行っていきたくと考えております。

それでは、よろしく願いいたします。

○平形農林水産省大臣官房参事官 大臣官房参事官の平形でございます。

米政策に関するシミュレーションの第1次の結果についてご説明をさせていただきます。

先ほどチーム長からご紹介がありましたが、この第1次シミュレーションは2種類の資料になっておりまして、資料3で縦長のものと、あと横長のものと2種類あるかと思いません。私の方から概括的にそのシミュレーション結果について説明をさせていただきます。続いて分析チーム員である木村企画官の方から試算の方式についてやや詳しく説明をさせていただきますと思います。

まず、この横長の「米政策に関するシミュレーション結果（第1次）について」というものをご覧いただきたいと思えます。

1ページめくっていただきますと「水田における作付体系」というものがございます。現在の水田の作付状況なんです、一番現近のものでデータのあるものとして20年産をとってございます。主食用についての作付面積160万ヘクタール、うち需給よりも過剰作付分が5.4万ヘクタール含まれております。それから、転作等の面積が79万ヘクタール、それからカウント分がそれ以外として30万ヘクタールというふうになっております。

生産調整の見直しのケースを考えた場合に、この160万ヘクタールの水稻の作付をベースにして、概念的には生産調整を強化して米価を維持するという場合、それから現在の生産調整の体制を継続するという場合、それから3つ目としまして、生産調整を緩和する場合なんですけれども、この79万ヘクタールあるうちの転作の定着状況が低いものから高いものがございますので、これについては2通りのパターンを用意いたしております。それから、4番目といたしまして、生産調整を廃止するようなことが考えられるということで、この4つのケースに従って、次のページになりますけれども、シナリオを5つ用意いたしました。

このシナリオでございますが、160万ヘクタールの水稻の作付に対しまして、シナリオの一番上でございますけれども、生産調整を強化して需給均衡よりも多少タイトな10万ヘクタールほど作付面積を減少させて、水稻の作付面積を150万ヘクタールとする。これを中長期的にも生産調整により維持していくというタイプの生産調整の強化シナリオ。それから現状維持シナリオということで20年度と同程度のものを継続し、具体的には麦、大豆、飼料作物等に関して産地づくり交付金、それから米価下落の影響緩和対策を継続して行う

シナリオ。それから3つ目のパターンとしまして、生産調整の緩和でございますけれども、まず10万ヘクタールほど主食用の水稻の作付面積が戻るというパターンでございます、それがシナリオの①ということでございます。生産調整を緩和するけれども、転作の定着状況の低い調整水田等の一部が、これが10万ヘクタールほどございまして、ここがまず一番最初に戻りやすいだろうということで、10万ヘクタールほど水稻作付が戻ることを仮定したシナリオ。それから、もう少し定着状況の高いものまで戻るケースとしてシナリオの②でございます、転作の定着状況の低い調整水田、それから自己保全管理等大体20万ヘクタールぐらいでございますけれども、これのほか大豆ですとか飼料作物等についてもバラ転作というものもございまして、これが大体10万ヘクタールぐらいあって、全部含めて30万ヘクタールほど主食用に戻るであろうという、そういうことを仮定したケースでございます。それから、最後に60万ヘクタール戻る、生産調整を廃止した場合のケースでございます。この場合は特に定着度の高い野菜ですとか果樹を除く面積、最大でも60万ヘクタールというふうに我々仮定しております、その60万ヘクタール水稻に戻るというシナリオを考えております。

この5つのシナリオに対しまして、市場価格、それから農家手取り、そして生産量というふうにシミュレーション、モデルを回してみたのが次の3ページ以降になります。

まず、市場価格の見通しでございますが、今回の分析においては、動学的モデルというものと静学的モデルという2つを用いて予測をしております。この動学的モデル、静学的モデルなんですが、第9回の会合において鈴木先生のシミュレーションということでご紹介いただいたものに近いものが動学的モデルでございます、前年の価格ですとか助成水田あるいは在庫量というものを見て当年産の生産量あるいは供給量、それが決まってくるという時系列的に継続していくようなモデルでございます。この表でいきますと折れ線のグラフになっているところが動学的モデルでございます。

もう一つ、静学的モデルというものもございまして、第9回の会合では、生産調整研究会のシミュレーションとしてご紹介させていただいたのがそれに当たるものでございますけれども、施策の見直し直後には市場がその合理的な反応を十分に行えない可能性もありますので、このためその価格に対する供給というものの反応ですとか、あるいは在庫の増減というものを勘案しないような、そういうことが起きるだろうということを想定したモデルになっておまして、表の中では矢印があつてバーがありますけど、短期的にはこのようになる可能性もあるということで、参考としてここに書かせていただいているのが静学的モデルということでございます。

これらを見ますと、まず結果といたしまして生産調整をずっと強化して、需給均衡以上のものをさせていくパターンでいきますと1万8,000円強の市場価格、これはセンター価格ということで考えていただければと思いますが、そういう結果になったと。それ以外につきましては、現状維持、それから生産調整緩和①、②、廃止というふうになり下がりになっておりますが、全体的に米の需要が人口減等あって下がっていく中で、全般的に右肩下がりになっている。

その中で、現状維持のものにつきましては、短期的には1万6,000円前後までいきますけれども、10年後まで考えてみますと1万5,000円弱ぐらいになる。生産調整を10万ヘクタール緩和されて主食が多くなった場合には、短期的には1万4,000円前後、中長期的にも1万3,500円前後ということでございます。

生産調整の緩和の②で、30万ヘクタール水稻の作付が戻るパターンでいきますと、短期的には1万1,000円を下回るぐらいになるんですけども、その後価格の変動等に伴い、需給がある程度調節され、1万2,000円前後の市場価格になると。一方、生産調整を廃止する場合なんですけども、一時的にこの同額のモデルでも7,500円程度まで下がるけれども、その後あまりにも値段が下がり過ぎるということもありまして、生産量が減り、若干値段が上下するというのを繰り返して、中長期的には1万円前後ということで価格が移動するだろうというふうに見込んでおります。

4ページ目を見ていただきたいんですけども、市場価格に対して農家手取りがどうなるかということの見通しと生産費の関係ということでここは整理しております。特にこの農家手取りにつきましては、担い手の場合でありまして、特に担い手に関しましては今収入減少影響緩和対策で5年中3年をとって価格補てんを行う対策がございまして、この現行対策のまま行った場合ということで仮定して計算をしております。生産調整を強化する、市場価格が1万8,000円前後になる場合には、1万5,000円台の中盤でずっと変わらないんですけども、それ以外のパターンでいきますと、1年目、2年目辺りは市場価格が下がったとしても、ナラシがある程度発動されてきますので、農家の手取りに関してはあまり大きな変化がないんですけども、3年目以降、ナラシの効果がある程度薄くなりますので、そこから先が農家の手取りについては変化がそれぞれ生じてきているということでございます。現状維持のパターンでいきますと、大体その7年目、8年目ぐらいに1万3,000円ぐらいの手取りになると。それから、生産調整の10万ヘクタールの緩和につきましては、5年目辺りから大体1万2,000円前後になると。それから、30万ヘクタールの緩和につきましては1万500円程度のものになる。生産調整を廃止する場合には8,500円ぐら

いのところからずっと上がらないという状態になっております。

参考といたしまして、平均の生産費というものがここに出ております。この生産費は全算入生産費から自己資本、利子、それから自作地の地代を控除した、つまり経営費と家族労働費を入れた60キロ当たりの生産費になりますが、現在は19年産で1万3,872円ということになっております。それが将来的にそれぞれのシナリオで1万3,000円台、2,000円台ということになるんですが、この平均生産費を達成するために可能な農業構造、例えば5ヘクタール以上の層をとった場合に、このぐらいの5ヘクタール以上の層があるとこの生産費が達成可能だというのが右の図になっております。現在であれば23%、5ヘクタール以上で1万3,872円ということでございまして、平均生産費が1万3,000円になったときは5ヘクタール以上が大体40%ぐらいいっしょにしなければいけなくなるし、1万2,000円的时候には5ヘクタール以上の方の割合というものが55%前後ぐらい必要になります。さらに、生産調整の緩和の30万ヘクタールになるような場合につきましては、1万円から1万1,000円の間になりますので、5ヘクタール以上の方の層が8割を超えるような水準にならないとなかなかこのところは達成しない。

ちなみに、その平均生産費というのを一番抑えた場合にどのぐらいになるかと、15ヘクタール以上の層に光を当てて見ますと、9,681円ということがあって、生産調整をもし廃止した場合には、どの規模の層であっても、このところをクリアするのは大変難しいという状況になっております。

それから、5ページ目でございますが、生産量の見通しでございます。

生産調整を廃止した場合には、一時的に水稻の作付が相当増えまして、300万トンほど多く作られるのですが、その後、価格下落に伴いまして生産量が上下いたしまして、大体均衡としては現在よりも100万トン程度多く生産される。もちろんその分価格は安くなるわけですから、消費量はある程度増えてこのところになるというふうに想定しております。それから、生産調整の緩和②、①というふうになってございまして、一番下のところでございますが、生産調整を強化するパターンで、ずっと価格が下がらないように強化し続けるパターンでは、米価は維持されるんですが、高い米価ということもありまして需要量がそれほど伸びず、食費に対して10年目には約100万トンほど消費量が減ると、ほかのところよりも減り方が大きくなるという、そういう見通しを立てております。

以上が概括的な結果でございますが、ちょっと順番が逆かもしれませんが、6ページの「前提」を見ていただきたいんですけども、本シミュレーションにつきましては、米政策に関して一定の前提を置いた上で試行的に行った試験結果と、前提を変えることによっ

て異なった結果がもちろん導かれることとなります。特に今回は米以外の作物による収入がないというふうに仮定しておりますので、現実の農家の手取りとは若干違う世界であります。こういう前提を置かないとこのシミュレーションはできないので、このように置かせていただきました。

また、米価の変動によって農家数の増減、あるいは農地の利用集積によって構造的な変化というものが現実的には多分起きると思うんですが、それが一応ないという仮定でシミュレーションを行っております。

それから、(3)のところでありますけれども、これらの試算につきましては、今後の米政策に係る議論に資するものとして我々も計算をさせていただいております。政策的方向性に何らの予断を持って作っているものではないということでございます。

7ページ、8ページにつきましては、米の全体需給の動向ですとか米政策の変遷ということについてご紹介をさせていただいております。

それから、資料3の縦長のほうの資料でございますが、若干これについても説明をさせていただきたいと思っております。この横長の資料が視覚的なものなんですけれども、縦長の資料はそのバックデータのものが入っております。

1ページ目のところで、試算としまして、マイナス10万ヘクタールからプラス60万ヘクタールまで主食用の作付がどうなるかについてシナリオを書いております。

2ページ以降、シナリオに沿ってそれぞれどういう考え方で、市場価格、農家手取り、生産量、作付面積、需要量というふうにならっているかという経年ごとの数字そのものも入れさせていただいております。3ページ、4ページ、5ページ、6ページというふうに、それがシナリオ5つについて入れております。

今回特に稲作農家の構造一本ではなくて、作付面積の階層ごとに8つの分類に分けて面積シェアですとか、反当たりの収量ですとか、価格弾力性等それぞれに乗じて結果をかなり細かく分析をしているので、そういう意味で相当一度分析するのにかなり時間はかかってはおりますけれども、なるべく実態に合った形でということで試算を試みさせていただきました。

7ページ以降の試算の方法については、木村企画官の方から説明させていただきます。
○木村農林水産省大臣官房政策課企画官 大臣官房政策課の木村と申します。よろしくお願いたします。

私の方からは試算の方法ということで、若干技術的なことが多いですが、できるだけ分かりやすく説明させていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

先ほど説明がありましたように、今回の試算では2つモデルを使っております。動学的モデル、静学的モデルというものでございます。いずれも米の需給を見たモデルということで、米の部分均衡モデルと言われるものでございます。今回の分析では米の輸出入による影響というのは考慮されていないということでございますので、鈴木先生の論文には、関税とか輸入量とか、そういった変数が入っているのですが、今回の我々のシミュレーションでは勘案していないということでございます。

まず動学的モデルでございますが、先ほど説明がありましたように、前年の価格とか助成水準、在庫量、これが当年の生産量、供給量に影響を与えるという意味で、時系列的なモデルとなっております。このモデルを使って1年目から10年目までの各年における価格等の予測を行っております。

モデルを構成する各要素についてですが、まず供給に関してでございます。先ほどもありましたが、規模階層ごとに供給関数を8階層に分けております。この手法は鈴木先生と同様の手法をとっております。各階層ごとに面積シェアとか単収とか弾力性、こういったものが違いますので、それぞれを考慮した供給関数を設定しております。各階層の生産量は前年の手取り額、それに補てん額を加えた額、そういうもので決定されるという構造になっております。

それで、各シナリオで1年目の作付面積の増減というものが前提として置かれているわけですが、これによって供給曲線がシフトして均衡が変化するというモデルの動き方になっております。その時、面積の変化率は規模階層間で一定と仮定する、つまり、どの階層も同じ割合で面積が増減していると仮定しております。

表の1に、面積シェアと単収が書かれております。

それで、ここからは鈴木先生のモデルから精緻化していった部分なんですけど、まず補てんの部分に関して、米価下落に対する影響緩和対策というものをモデル上組み込んでおまして、その対象を今の、現行の制度上の要件がどういう要件かということと、あと今の加入面積はどのぐらいかというものを勘案して決めております。

まず、担い手を対象とする収入減少影響緩和対策、いわゆるナラシですが、これは制度上4ヘクタール以上と、特認で2.6ヘクタール以上という加入要件になっておりますので、我々の8階層のうち3ヘクタール以上の4階層、これを対象としております。

もう一つ、担い手以外を対象として稲作構造改革促進交付金、いわゆる稲構ですが、これは1から3ヘクタール未満の2階層を対象としているということでございます。これは今稲構は大体対象面積は50万ヘクタールぐらいということでございますので、1から3へ

クター階層ぐらいが大体そのぐらいの面積規模に当たると仮定して置いてあります。

8 ページでございます。どのように補てんされるかですが、担い手のナラシについては、今の制度と同じく、センター価格の5中3平均で出される基準価格、それと当年のセンター価格との差の9割を補てんしています。センター価格というのは市場価格のことでございます。

それで、稲構も同様に5中3平均の基準価格と当年価格との差の9割を補てんしますが、この制度は基本的に地域で設定する単価での定額補てんであり、差額の9割までということでございますので、できるだけ現行制度に合わせるという意味で、全国ベースの一般部分の単価10アール当たり4,000円というのがございます。これは60キロ当たりになると460円程度なんです、それを補てん額の上限と設定しております。

それで、以上2つの米価下落対策の対象者なんですが、これは生産調整の達成者、実施者に限られるというように仮定しております。それで、達成者、未達成者の割合がどうなっているのかということですが、まず割合は、施策の見直し、当初マイナス10万ヘクタールからプラス60万ヘクタールまで施策の見直しを行います、その時の見直しによって一度変化して、あとは年々の価格変動には影響されないという仮定を置いております。推計したものが表2に書かれております。それで、どのように推計したかを、横の先ほど説明した絵の1ページの作付面積の絵を眺めながら聞いていただきたいと思います。

まず、シナリオ3とシナリオ4に関して、それぞれ10万ヘクタール、30万ヘクタール転作田が水稻に戻るというのは、この絵だとオレンジ色の部分が10、30戻るということでございます。それで、参加者、未達成者というのは、この絵には出てこないんですが、実は黄色の160万ヘクタールのところに、この表2の一番上の数字で言いますと0.71対0.29ですので、大体7対3ぐらいの割合で達成者がいます。例えば左側の7割が達成者で、右側の3割が黄色の部分の未達成者であるとします。それで、施策の見直しが行われたときに、転作田から水稻に戻るその10なり30なり、これが新たに未達成者の面積に入ってくる。これに加えて、今まで7割達成者の人たちが担っていた作付面積、ここから一部が未達成者に離脱するということになるので、この0.7から一部が未達成者の方に移るということで、達成者の割合が変わってきます。このように転作田が増えるという要素と、今、米をつくっている達成者が、今度は未達成者になって引き続き米を作るという部分、両方を勘案して達成者・未達成者割合を算出したということでございます。それが表2でございます。

それで、この達成者・未達成者割合をどうして出したのかというと、各階層ごとに毎年毎年補てん額が決まるわけですが、その階層によって参加割合が違うという点をモデル上

反映させたかったので、この割合を出しました。

それで、8ページの一番下に書いてありますが、各年の補てん額にこの達成者割合を乗じたもの、これを各階層における平均補てん額とみなします。これがその階層の翌年の生産量、これを決定するというような設定にしております。こういう設定をしないと、この階層全員が補てんされるという設定になりますので、そこはなるべく現実に近づけたということでございます。

9ページでございます。「需要」でございます。我々のシミュレーションでは米の需要関数の変数として米自体の価格、小売価格のほかに、人口、それから代替財としての小麦の価格、さらにこれ以外の要因のトレンドに応じて需要量が決定される関数を設定しております。それで、人口は将来推計人口というのがございます。2004年がたしかピークだったと思いますが、トレンドだけをとるとそういう2004年にピークになる人口で、そこから減っていくという辺りの影響が出せませんので、これを変数として抜き出しております。さらに小麦の価格についても、これは昨年農林水産省から公表しました「2018年における世界食料需給の見通し」というものを出しております。これで徐々に小麦価格というのは上昇していくという見通しを出しておりますので、これが米の需要量に影響を与えるのではないかと仮定して変数を組んでおります。

小麦の価格が米の需要にどう影響するかというのは交叉弾力性というもので求められますが、これは0.04という既往の研究から引用させていただきまして使っております。これは非常に小さい値でございますが、あまり影響がないんですが、10年ぐらいのスパンで見ると数万トンというレベルでございます。それで、価格はこのモデルでは生産量と期首在庫の合計、この水準に応じて市場価格が決定されるという構造になっております。生産者価格、小売価格は市場価格に対してそれぞれの価格反応式、これによって決定されます。

それから、在庫は毎年の供給量と需要量の差、これがモデル上出てきますので、これが期末在庫となり、翌年に全量供給されるというものでございます。それで、留意事項として尚書きを書いておりますが、今回のシミュレーションでは政府備蓄の運営とか生産調整目標の配分方法とか、米の需給に影響を与え得ると考えられるものについては勘案しておりません。さらに、農業者数の増減とか、規模階層間の農地の移動等の構造的な要素の変化については明示的には組み込んでいないというものでございます。

それで、先ほどのシナリオ1の2年目以降、価格は一定になっていたグラフをご覧になられたと思いますが、これはシナリオ1の2年目以降だけ、価格と在庫、これを一定水準で固定しております。価格を維持するというシナリオになっておりますので、需要の減少

に応じて生産調整面積が算出されるモデルに修正して予測を行っているところでございます。

それから、次に静学的モデルの説明に移りたいと思います。これは、各シナリオによる施策の見直し直後には、市場は動学的モデルが想定するような合理的な反応を十分に行えない可能性があるという仮定を置いた上での予測ですが、供給の価格に対する反応とか在庫の増減とか、動学モデルでは勘案しているこれらの要素について勘案しないモデルとして使っております。これで短期的な予測を行っております。

モデルを構成する各要素は、まず供給に関しては、短期的には生産者は価格変動に反応できないと仮定して、作付面積の増減に応じて供給が決定されております。需要量は供給量に一致すると仮定します。価格は供給量に一致する需要量に応じて決定され、生産者価格、小売価格はそれぞれの価格反応式により決定されます。在庫は供給量と需要量が一致して生じないという仮定を置いています。これはすべて生産調整研究会でのモデルにおける短期予測のモデルの構造と同じでございます。

それで、このモデルの結果は、ある意味極端な仮定を置いておりますので、その予測でありまして、短期的に起こり得る大きな価格変動の一つの目安、参考的な目安と考えるのが適当です。特にこの静学的モデルを使った短期予測の値と、先ほどの動学的モデルで出くる10年目の価格、これらを同じレベルで比較するのは必ずしも適当ではないと、前提が違いますので、その点は留意する必要があると思います。

それから、次に弾性値の推定方法に移らせていただきます。

まず、供給の価格弾力性でございます。これは鈴木先生の手法と同じ手法を使わせていただきましたが、コブ・ダグラス型生産関数と、少し専門的になりますが、要は生産費の各要素の割合を使って弾力性が出せると、そういう前提を置けるというのがこのコブ・ダグラス型生産関数というものでございます。それで、その生産要素を分析して階層別に弾性値を出したのが表の3でございます。

一般的に低い階層ほど弾性値が低いと言われております。それは兼業収入とか、色々な要素がありますが、それをなるべくモデル上に反映したいということで、3ヘクタール未満の階層については多くの生産要素が固定的になっていると考えまして、肥料、農薬等の流動財、さらに雇用労働のみを可変費用と仮定しております。

一方、3ヘクタール以上の階層については、さらに土地の流動性も考慮しまして、先ほどの流動財、雇用労働費に加えて地代も可変費用と仮定します。こうすることで、3ヘクタール以上階層は弾力性が大きく計算されることとなります。それが表3のとおりとなっ

ております。

それで、各階層で序列がきちんとなっていないというご指摘があるかもしれませんが、これは今申し上げたような2つのルールでそれぞれ機械的に計算するとうなるということでございまして、これを無理やり序列になるように仮定をいろいろ置きますと、それは恣意的なものになってなかなかその客観性を保てないということでございますので、今回はその序列に関しては考慮していません。

次に、需要の弾力性でございます。これは先ほどご紹介した2つの既往の研究と同じマイナス0.3349というものを引き続き使っております。これは、米の価格に加えて実質賃金率とか、世帯規模、こういうものを説明変数に加えて計測したものでございます。

それで、前々回の会合でもいろいろご指摘いただきまして、我々の方でもいろいろ需要関数はどういうものがあるのかということ調べましたが、ある研究では、日本の米の需要の価格弾力性というのはマイナス0.1からマイナス0.5ぐらいであり、平均をとればマイナス0.3ぐらいではないかというような研究もございました。それで、近年の米の消費を見ると、弾性値は上がっているのではないかというご指摘もいただきましたが、一方では米の弾性値というのはゼロに近いのではないかというご指摘もありますので、今回はその中間的な意味も含めて同じマイナス0.3349という数字を使っております。

それで、11ページでございますが、(3)、(4)の小売価格、生産者価格の市場価格に対する伸縮性、この計算方法は生産調整研究会で用いた手法と同じ手法で計測し直して、この数字が出ております。

それと、あと最後12ページの市場価格の生産量、期首在庫量に対する伸縮性というものを鈴木先生の論文のモデルで使われているものですが、これも推計し直しました。生産量、期首在庫量の合計というのは、趨勢的に減少傾向にあるものですから、これについてはトレンド変数を入れております。それで、計測結果はマイナス3.03ということで、鈴木先生の論文で引用されているのはたしかマイナス2.4ぐらいだったと思いますが、非常に近い値が計測されているということでございます。

ということで、少し説明が細かくなり過ぎましたが、以上で説明を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

○針原チーム長 ありがとうございます。

政策課長、何か付言することはございませんか。ないですか。

では、議論に移ります。

今までの説明について、どなたからでもご意見をお願いいたします。鈴木先生、どうぞ。

○鈴木委員 大変精緻なモデル体系を作られて、様々な指標について試算ができる体系ができておりました、その分析チームの努力に大変敬意を表したいと思います。

それから、こうしたシミュレーションの試算値をベースにして幅広い議論を展開しようとする姿勢は、農林水産省さんのこれまでの流れからしましても、非常に画期的なことだと思いますので、そういう意味でも大変評価されることではないかというふうに思います。

数点だけ今後の検討で少し考えていただきたいなと思いましたが、1つは、今回の試算では価格とか量につまましての試算値をお出しいただいていますけれども、政策としての評価ということを考えていく場合には、当然ながらその政策にかかるコスト、財政負担の額がどのぐらいかということは当然出てくる一番のポイントになろうかと思えますし、それから今回の議論の中では、国民全体の利益という観点から、総合的に評価するということが大きなポイントになっているかと思えますので、そういうことができるような指標、例えば消費者の利益というのとはどのぐらいあるのかと、生産者の損失はどのぐらいか、財政負担はこのぐらいかかるけれども、総合的に見てこういう流れがいいのではないかというふうなことが議論できるような指標をもう少しそろえていただくと、さらに議論が進むのではないかというふうに考えます。

それから、もう一点、お米の価格の水準でございますが、現状の収入変動緩和対策を前提とした試算でございますと、先ほどの横長の方の4ページのところに、生産費を償えるためにはどのぐらいの、5ヘクタール以上がどのぐらいにならなきゃいけないかというような数字も示されておりましたが、こういうのを見ますと、現状タイプのナラシという制度を前提にしますと、生産調整が緩和されるような状況ではかなり経営が厳しくなるような状況も想定されますので、今回のいろんなヒアリングの中でも非常に米価の下落が激しくて、経営がもたないというような声もたくさん聞かれた中で、この所得の下支え機能というのをどんなふうに考えるのか。所得の確保というのを非常に大きな課題としてここでも挙げておる中で、その部分について何らかの付加的な施策なりその仕組みというものを入れた場合に、どういう結果が得られるのかというような点についても、ひとつ検討いただくといいのかなというようなことを思いました。

取りあえず2点ほど申し上げました。

○針原チーム長 ありがとうございます。

少し私から今の鈴木先生のご指摘を踏まえて質問したいんですが、例えば国民全体の便益ということが、今後ご指摘のようにすることが可能かどうか。

それから、別のシステムで、別の施策要因を入れるということだろうと思いますが、ほ

かの要素を入れた場合に、そのシミュレーションがまた式が変わったりなんかするんだろうと思いますが、よくわかりませんが、それが可能かどうか、このチームの検討期間との関連もあるので、少しその辺の感触をちょっと聞かせていただければと思いますが。

○末松農林水産省政策課長 検討するに当たっては、今、先生のおっしゃられたようなことも検討しなくてはいけないのではないかという議論をしてきたところでございますが、1つは、いろんな場合、こういう場合にこういう場合を区画するというのが加速的に増えていくということで、すべての場合をやるというのはなかなか難しいことがありまして、こういう今次にどこに焦点を当てるかということについてまたいろいろ議論しながらやっていく必要があろうかと思っております。ただ、消費者の利益とか生産者の損失ということについては、指標化するといういろんなやり方もありますので、そういうのも検討していかなくてはならないというふうに思います。

それから、いろんな下支え機能ですとか財政負担の話とかについても検討することは必要だと思っておりますが、施策というのはいろんなタイプがありますので、単純にその財政負担というものだけではなくて、いろんな推進の仕方とかありますので、そういうことをどう考えていくかというのは、さらにちょっと検討を深めなくてはならないんじゃないかというふうに思います。

○平形農林水産省大臣官房参事官 このモデルを作った人間としても、施策が必ずしも一対一対応にならないというか、難しいところがあって、この施策をこうやれば必ずこうなるというふうにはなかなかならないところもあって、どんなやり方が可能なのか、そういうことについてもこの期間をいただければ、いくつかの検討はやっていきたいというふうには思っております。

○針原チーム長 ありがとうございます。そのほか、どうですか。

ちょっと目が合ったのですが、梅溪さん、どうぞ。

○梅溪内閣府大臣官房審議官 少し3つほど質問させていただきます。このモデルで先行きの価格、需要量、生産量をお示しされているわけですが、こういうモデルを作るときは過去の実績がどれぐらいモデル全体としてうまく追えるかということをチェックすることがあると思います。そういう観点でここに示されているモデルは、例えば過去10年とかのお米の需要・生産・価格などをどの程度説明できているかご検討はされたのでしょうか。これが1点目です。

2点目は、前提の置き方について、弾性値は丁寧に資料で説明されていました。これももし何か検討されていることがあればということをお伺いしたいんですが、需要の弾性値、

それから供給の弾性値、どちらもそうなのですが、これを少し変えるとこのモデルの解というのはどれくらい変動する可能性があるのかというのを、お伺いしたいと思います。

それから、3つ目は、階層別の農家の数、階層別の農地の総量というのは、この10年間では変わらないという前提で作業をされているということでした。ただ、先ほど鈴木先生もご指摘されていましたが、やっぱり5ヘクタール以上の層が大きくなっていくことによって、生産費がこれくらいになるということの一つの物差しにして結果を測るのであれば、規模が大きくなるような担い手が中心になっていくというメカニズムもこのモデルに入れていく方が、結果として得られる政策情報はより豊かになるのではないかと思います。そういう方向での検討を、今後さらに深めることは可能なかどうかというのをお伺いしたいと思います。

その3点です。

○針原チーム長 よろしく申し上げます。

○木村農林水産省大臣官房政策課企画官 まず、3点のうち最初のこのモデルが過去の実績にフィットしたかどうかについて検証しているのかという点ですが、これは、主な変数について過去10年の実績値と再現値との差の比較というのを行い、誤差は5%以内という結果になりました。この5%というのは我々非常に適合性が高いものだと考えております。それに加えて、各弾性値を計測する際にも、供給の階層別の弾性値とか、あと需要の関数がそれぞれ変数がどう影響してくるかというものも、過去の実績を使いまして、比較して最も適合性の高いものを選択しております。

それと、あと2点目の需要の弾性値が変わるとどのくらい影響が変わってくるのかというのは、正直なところ計量的にはやっておりませんが、弾性値がマイナス0.33よりさらに低くなれば、それだけ価格反応が過敏になりますので、さらに価格が下がるという結果になると思われま

す。それから、3つ目の階層別の分析で、規模の拡大が進んでいくというメカニズムについて入れていくというのは、我々としても非常に重要な課題だと思っております。ただ、今のところその規模拡大が進むようなメカニズムを計量的にモデル上再現したという例は私の知る限り存在しません。今後どういう形で対応できるかどうかわかりませんが、その点も含めて今後さらに検討を深めていきたいと思

○針原チーム長 今の点、私からもちょっと付言させていただきますと、確かに規模拡大という政策を片方ではとっているわけですから、その要素を今後入れるというのは必要かもしれませんが、ただこのモデルとして政策の結果をどう入れるかというのは、かなり恣

意的なウエートの変更を行わなければいけないのかもしれませんが。過去のトレンドで見ると、確かに規模拡大は緩やかに進んでいきますが、その今の現状のペースではこの全体の結果に影響を与えるようなスピードでは今のところ進んでいない。それがまたこの我々のチームの検討課題、あるいはこのチームが編成されたゆえんにもなっているのかもしれませんが、そこは非常に重要な課題として次のシミュレーションをやるときには、それ自体このチームで議論を行わなければいけない課題ではないかなと思っております。

ほかはどうでございますか。

○石黒経済産業省大臣官房審議官 規模の話が出ましたので、それぞれその価格が下がる場合に生産量かだんだん増えていくということで、その産業全体で見たときにこの米を作るという産業が要する何兆円産業とか何千億円産業になるのかという意味では、ここの表にある市場価格と生産量の掛け算の結果はどうなるのかというのをまず見ていいのかどうかかわからないのですけれども、その掛け算をしてみると、暗算でやったのでちょっと間違っているかもしれないのですが、一番最初のシナリオの方が掛け算の値が大きくなってしまっていて、一番下の方が一番小さくなると。いずれにしても、初期値の掛け算の値よりも随分小さくなるというふうになると、このシミュレーションではいろいろやっても産業全体の規模は縮小してしまうというような印象を得たんですけれども、そういうふうに読んでしまっているのか、そういう掛け算をしまっているのかというご質問です。

○平形農林水産省大臣官房参事官 米については、確かに単純に計算すると価格掛ける生産量で言えば、生産学的に言えばこの5つのシナリオのうち、生産調整の強化シナリオというのが一番高いものに単純に計算すればなるんですけれども、ただ農業生産にとってこのチームの中でも議論をしていただいた中で、生産額という価格P掛けるQから生産コストを控除した農業所得というものについて、これがやっぱり追っていく必要があるだろうと。だから、一概に生産額が高いことイコール産業が活性化しているというふうには捉えないように考えておまして、例えば価格が高く、その量は少ないんですけども、一番生産額は多いけれども、ただ持続性からしてこの産業は本当に持続できるのかどうかということになると、必ずしもそれは同じ問題にはなかなかならないということがございますので、単純に計算するだけではなくて、産業としての持続性ですとか、特にこのP掛けるQマイナスCのところをどう置くかということについても視野に入れながら、シナリオについても考えていくのがこのチームの検討に沿ったやり方だというふうに考えております。

○鈴木委員 今の点に関連してちょっと補足的に申し上げますと、先ほども私が質問した点と関連するんですが、社会全体での利益ということ考えた場合には、その生産額を維

持するためにはどれだけの財政負担が必要になっているかという点を差し引かなければいけませんし、それから例えば価格が下がっている場合には消費者のメリットが相当増えているというような点も勘案しますと、トータルでのその社会的利益というのがまた出てくるわけですので、そういう観点も併せて検討する必要があるかなというふうに思います。

○大内内閣参事官 2点ほどちょっと教えていただきたいんですけども、まず1点は、この表にも横長の資料にも載っておりますけれども、後ろ7ページですね。全体の需給の動向というのを見ていただきますと、過去いろいろな変動がありました。政府の持ち越し在庫量というのは大きな変動があったわけです。それがまた財政負担をその時々で大きく招き、それが生産調整を加速させる、または生産調整の猫の目というのを招いてきたと我々思っておるわけです。

この前提として、今の質問の1点目は、まず備蓄なりその在庫量といいますか、その持ち越し在庫量と申しますか、それらについてはどのようなシミュレートの結果、またはその前提を置いて考えられたのかというのがまず1点目。

2点目は、ここで出ております結果、いくつかの点で、例えばシミュレーションの現状維持はともかくも、①、②、生産調整緩和の場合においては、いざという時の予備的な供給余力という点、要するに何らかの輸入途絶が起った場合に、国民に対して安全の供給を確保するために、例えばここに書いてある一番最初の1ページ目に書いてありますような地力増進作物とか調整水田、いざとなればそこは米の供給にも回すことができるんだと、だからそこは生産調整で維持してきたんだということもあったわけですが、そういう点について見ると、それぞれについて、短期的な輸入途絶等に対する供給余力は大きくシミュレートの中で変わってくるのではないかと思うんですが、その点については何かお考えになったことが、このシミュレートの中で前提を置かれたりしたことがあるのかどうか、2点お伺いしたいんですが。

○木村農林水産省大臣官房政策課企画官 まず、1点目の備蓄在庫に関してどういう前提を置いているのか、シミュレーションでどういう扱いになっているのかということですが、先ほども簡単には触れさせていただきましたが、まず動学的モデルにおいては、供給量と需要量の差というのがモデル上毎年出てきます。これが期末在庫として計上されます。それで、その翌年に期末在庫として積み上がったもの、これが全量また市場に供給されるということで、政府による備蓄の運営とかそういうものはモデル上は勘案していないということでございます。この在庫には、民間在庫と政府備蓄と両方含めてシミュレー

シミュレーション上は計算されているということでございます。それで、備蓄運営によって価格とか生産量はどのような影響があるのかというのは、米政策上非常に重要な視点だと思いますので、今回のシミュレーションでは勘案しておりませんが、今後の検討の中でどのような形でモデルで再現できるか、検討していきたいと思っております。

二点目の供給余力に関してでございます。私の考えでは、供給余力というのは、いざというときに生産に使える農地の面積のことであると近似的に言えるのではないかなと思うんですが、このモデルでは結果的に転作面積も含めて、将来的に水田の面積はどうかということまではモデル上入っていません。具体的には米の作付面積までは出ますが、その裏にある転作の面積がどうか、これについてはまた別のシミュレーションが要するというところでございます。

転作の助成をどのぐらいにすれば転作が維持されるのか、また転作の助成を削減すればもちろん転作も少なくなるわけですから、それで耕作放棄地が増えると、結果、供給余力も減るという関係にあるのではないかなと思っておりますが、そういうことで水田農業全体の供給余力を考える場合には、このモデルに加えて、転作がどう変わっていくかというシミュレーションが必要ではないかというふうに考えておりました、今後の検討課題だと思っております。

○針原チーム長 そのほかどうですか。

本日、いくつか指摘をいただき、今後シミュレーションの成熟度を増すために非常に重要な論点が出されたと思っております。このシミュレーションはあくまでも1次シミュレーションでございますし、是非これ自体意見募集の俎上にのせて、改良を加えていただきたいと私自身も考えているわけでございます。その上で、これはまだ政策論議の入り口の入り口、まだそこまで入っていないところでございますので、これからその政策論議をする際にいろんな考慮要素があるんだと、その一部をこういうシミュレーションで見ると、そういうことだろうと思っておりますので、そういうものとしてこれからの検討をこのチームで行っていきたく思っております。

○迫田財務省主計局総務課長 シミュレーションの中身についてのご議論だったと思うので、ずっと黙っておりましたけれども、シミュレーションとしては恐らく精緻なものに多分しておられるんだろうと思うんですけれども、6ページで書いておられるように、恐らく相当限定的な前提を置かざるを得ないんだろうと思うんです。そこで、今後の改良の度合いというものもあるんだろうと思うんですけれども、果たしてどこまでインプリケーションを政策的なものとして持ち得るのかというところは、実は非常に私個人はむしろ限界

がやはりあるのではないかというふうな感じがどこまでいってもあるのではないかという感覚を持っているんです。

特に、生産サイドの構造の変化みたいな話をどう取り込まれるのかという話の一つあるんでしょうけれども、恐らくここでの計算でも10年先ぐらいまでのことを見てかかるとか、動きを考えておられるのであるならば、当然その10年間、今の生産構造がそのままであるということはほっておいてもないだろうし、逆に言うとむしろそれを何か変えていかななくてはいけないという、政策的な働きかけをむしろしなくてはいけないという、そうことが背景に多分あるんだらうと思うんですね。

鈴木先生はその4ページをもって、何らかの支援が必要だというお話がありましたけれども、逆にその農地の集積をどの程度進められるかという話が当然裏側にあるんだらうと思いますし、そこをうっかりすると、計算するところなるからこうだという話が、本当にどこまで我々の行政の世界で言えるのかというところは、やや注意深く考える必要があるんだらうと思うんですね。シミュレーションの中身自体になんかけちをつけるという意味では全くないんですけれども、恐らくどこまでいってもどこか限界が来るとというのが、恐らくこの種のシミュレーションの持つ部分だらうと思うんで、そこはやっぱり頭に置いておかなくちゃいけないんじゃないかと思うんです。

恐らく、生産調整廃止というシミュレーションで、60万ヘクタール米の作付を拡大するんだということになればこうなるということなんでしょうけれども、直観的に例えば生産調整廃止と言って、本当に1,100万トンぐらい一気に翌年生産量が増えるという話に本当になるのかなという気は実はしてしまっていて、40年間生産調整をずっとやってきて、しかも米余りだというふうな漠然とした印象がある中で、例えば生産調整をもう廃止します、どうぞと言ったときに、みんな一斉に、じゃ米を作るかといって、どんどん米を作って、一気に何割増しも翌年米の生産に走ってしまうということは本当にあるんだらうかという気は直観的にするんですね。60万ヘクタールというところが入っていけばこうなると、多分そうなんで、シミュレーションとしては恐らく緻密なことだし、過去等検証しても問題ないということなのかもしれないけれども、この試算結果が示すことの背景にある世の中で生じている事象というのが、本当に我々の想像ができるような、あるいは現実可能性の高いようなものなんだらうかというふうなことを例えばこの一つとっても私なんか思うわけですね。それは別にシミュレーションがどうこうと言うつもりはないんですけれども、恐らくそういうおよそシミュレーションというからには内包している限界みたいなものがやっぱりあるんだらうと思うんで、そういう前提の上でそのシミュレーションというものの

精緻の度合いを高めるというのが多分今後の必要になるのではないかなというふうに思います。

○針原チーム長 シミュレーション自身じゃなくて、このシミュレーションの使い方あるいは今後の検討の方法論についてのご意見だったと思います。それも含めてご意見ございますか。

○鈴木委員 少し関連するかと思いますが、あと先ほどチーム長が言われた、このシミュレーション自体が今回の特命チームの検討の一つの要素であって、これだけがひとり歩きするとか、そういうことではないという点をやっぱりきちんと確認しておくことも重要かなと思ひまして、そういう点で言いますと、これは私の個人的な理解ということかもしれませんが、今回これまでのいろんな議論で、農業経営が非常に伸び伸びと創意工夫できる環境を整えるということは非常に重要だという一方で、その担い手というのは多様で、戦略は多様だというふうな点もしっかり考えなければいけないという点とか、先ほど申し上げましたように、農業所得の確保という点では、最低限のセーフティーネットというのはどう考えるとか、それから農業の持つ多様な価値ということにも十分配慮した直接支払いの充実も必要だと、そういうふうないろいろな論点が出ておったかと思ひますので、それらがセットになってその大きな施策体系が考えられているわけですので、このシミュレーションで現在出てきている部分というのはまさにその一部でございますから、これも含めて総合的な施策体系を、これをもとにどうやって全体のフルセットを考えるかというふうな視点がやっぱり必要かなというふうに思ひますので、その点を今回いろんな形でこのシミュレーションを活用される皆さんにもそういう観点をお持ちいただければという、個人的な見解も含めまして意見でございます。

○針原チーム長 ありがとうございます。そのほかには。

○梅溪内閣府大臣官房審議官 今65歳以上の農家の方が過半を占めているので、10年以上たつと75歳以上の方に代わって行ってほぼ農業ができなくなるんじゃないかということをお前提にこれまで議論していました。シミュレーションの生産について、あるいは需要の方はそれほどでもないかもしれませんが、そういう農家世帯が高齢化しているということは、何かイメージ的に織り込まれているのか、あるいは織り込むことは可能なのかということをお伺いしたいと思います。

それから、先ほど経済産業省の方からもご指摘があったんですが、この農政改革の検討方向では、一つの検討項目として農業所得の増大ということをお掲げています。従って、シミュレーションをしていくときも、全体としてこれが農業所得の増大にどういうふうにか

かわってくるのかというのは整合的に議論した方がいいと思います。

しかも、農業として全体の農業所得を増大するという、そういう文脈で文章は書いてありますが、実際の政策を実行していく上では、農家の方にとっての所得がどうなるかということも極めて関心の高いことだと思います。そういう観点ではやはりこのシミュレーションが農業所得とどういうふうに関係してくるのかということのも、可能であればおいおい検討を深めていただけたらいいのではないかと思います。

それから、平形参事官からご説明がありましたこの横長の資料のほうですが、鈴木先生は先ほど財政コストということで抽象的に今日の段階ではおっしゃっていましたが、この横長の資料の2ページでいくつかシナリオが書いてあって、この考え方をいくつか読むだけでも、どれなら今の財政コストに比べてさらにお金をつぎ込まなければいけないのかとか、どれなら今よりも少なくて済むのかとか、もし今日の段階でこの5つのシナリオについて方向性なり感触なりをお聞かせできるものがあれば、ご説明いただければありがたいと思います。

○木村農林水産省大臣官房政策課企画官 私の方から1点目についてご説明させていただきますと思いますが、先ほどもご指摘いただきましたように、農地が、経営が大規模化していくようなメカニズムとか、それと同様に65歳以上の農家が10年後どういう割合で例えば農業から撤退していくとか、そういう構造的な側面に関しては今回のシミュレーションでは織り込んでおりません。

それで、先ほども申し上げましたけど、そういう要素をこういう米の需給モデルに加える形で織り込めるかどうかというのは、今の時点で私が知る限りはないんですが、そういうことができるかどうかも含めて今後検討していきたいと思います。

ただ、その際には、チーム長からも指摘がありましたように、設定の仕方が恣意的になる可能性がありますので、その辺は留意しながら、どういうモデルの構築が可能か検討していきたいと思っております。

ちなみに、需要の方に関しては、トレンドという形で高齢化が進んで人口構成が変われば需要が減るという点は織り込んでおります。

○平形農林水産省大臣官房参事官 私のほうからなんです、3番目の質問でございます。

どれなら今よりも少なくてという話なんですけれども、先ほどもちょっと申し上げましたけれども、生産調整を何万ヘクタール強化するかということでもまず仮説を立ててやっております、それに合うであろうと政策の体系というのが、多分一対一対応ではなく、いろんなタイプがあるので一概にはなかなか言えないところがあるんですけれども、

傾向としましては、生産調整を強化するシナリオで、米の消費量が減っていけば、当然その生産調整を強化していったら、転作のところで助成金がずっとかかるわけですから、それは今よりも多分かかるだろうという事は容易に想像できることと、60万ヘクタールの廃止するものについては、生産調整に関する助成金、それから生産調整を前提としたその下落対策についてもやめてしまうということになりますので、そうするとほとんどお金がかからなくなるというのは間違いありません。それ以上のところはなかなかちょっと今精緻に詰められるような状態ではないというのはちょっとご理解していただきたいと思います。

○鈴木総務省大臣官房企画課長 3つほど質問がございますが、1点目に、持続可能な農業で特に企業の参入とか、企業的経営とか、産業としての発展とか、競争力がこれまでも議論に出てきました。そういう観点からしますと、仮にいろいろな生産調整とか支援策をなくしたりした場合に、企業的な農家は主食用でない米粉用とか、加工用とか単価が安くてもコストを安くして売るシナリオも出てくると思います。それはまさに「価格掛ける数量マイナス生産コスト」だと思いますので、そういうことを考えた場合に、主食用のお米の価格ということで試算し代替財としての小麦との関係は少し考慮されているようですが、米粉などの主食用以外のお米の価格のマーケットとの何かリンクージというのは考慮されていますか。

2点目に、お米の価格に関しては、自立した農業ということであれば、WTOを多少念頭に置きますと、最近どれくらい国際マーケットで取引されているのか知りませんが、タイ産米などの国際的なマーケットの米価格に比べてこの各シナリオで想定される価格の水準というのは、どうなのか。国際マーケットとの関係は考慮されているのかというところが、もし分かるのであれば教えていただきたい。

3点目に、農家所得という意味では、「数量掛ける価格マイナス生産コスト」というのでは、横長資料の4ページに、15ヘクタール以上層の平均的な生産費というのが書いてありますが、それ以外は全部トータルな生産費になっていますので、縦長資料の7ページで言いますと、水稻の作付面積規模階層別で8階層に分れておりますが、この8階層別の生産コストというのは分かるのでしょうか。作付面積規模階層別の生産コストにはどの程度の差があり、それによって実現するお米の価格と持続可能な農家、農業というのはある程度考察できるのかなと思います。

○木村農林水産省大臣官房政策課企画官 まず、1点目の主食用でないお米との関連でございますが、今回のモデルはご説明したとおり主食用米に限った需給モデルの積というこ

とになっております。考えられるのは、いわば加工用米と言われているお米とか、あとこれからマーケットが大きくなるであろう米粉用とか、あと飼料用と思われま。これからますますこれらのマーケットが大きくなっていくと、同じ米ですから完全な代替財であり、また主食用米とは違った影響があると思われま。です。ので、これから考えなければいけないんですが、その加工用米のマーケットというのは、今この主食用米に比べて非常に小さいと、数%ぐらいのレベルでしかないんで、その辺の影響はないと今回は仮定して試算をしているというところでございます。米粉用の米がどんどん増えてくれば、そういう分析もしていかなければならないと考えております。

○平形農林水産省大臣官房参事官 すみません。それから、ちょっと国際的なマーケットとの関係で、今手元にしっかりした資料がないんですけれども、大体中国産の主食用のものが輸入されている価格が8,000円前後ぐらいで今たしか入札をされているかと思いま。ので、それが1つ。ただ、それにまた関税をどのぐらいかけるかということもありますので、それとの比較になってくると思いま。

それから、規模別の、その階層別の米の生産費についてご質問なんですが、一応4ページのところに5ヘクタール以上の割合が、例えば1万3,000円の場合35から45%というふうに書いてありますけれども、これは規模別のその生産費が分かっておりますして、それをどういうふうに組み合わせるかによってパーセンテージが変わってきているものということでございますので、今ちょっと口で申し上げれば、0.5ヘクタール未満であれば、生産費が2万581円、0.5から1ヘクタール未満であれば1万7,277円、1から2ヘクタールが1万4,592円、2から3ヘクタールが1万2,273円、3から5ヘクタールが1万1,352円、5から10ヘクタールが1万34円、10から15ヘクタールが9,575円、15ヘクタール以上がここに書いてあります9,681円というふうに、ちょっと10から15ヘクタールと15ヘクタール以上のところが若干これ逆転しておりますけれども、今の機械の一番効率的なところがこのところに、10から15ヘクタールのところに効率的に機械が利用でき、15ヘクタール以上になると例えば2台目を買うとか、そういうところが若干影響しているのではないかと。いうふうに思われま。けれども、ちょっとそれ以上の分析は、すみません、今のところありません。現データが集まっているということでございます。

○針原チーム長 そのほかどうですか。

本日は、シミュレーションの中身、それから使い方、それから今後のこれを活用した検討方法、幅広い議論、このシミュレーションというツールを介して議論することができたと思いま。非常に濃い議論ができたことに感謝いたします。

まだご発言されたいという方もいらっしゃると思いますが、そろそろ予定の時間にちょっと早いですがまいりました。

先ほど、最初に申し上げましたとおり、今後しばらくは農林水産省を中心に具体的な内容について検討を進めていただき、6月の上・中旬にこのチームの検討を再開したいと考えております。正式なご案内につきましては、日程を調整させていただいた上で改めて文書にてご案内申し上げます。よろしくお願いいたします。

ほかにご発言なければ、本日はこれをもって閉会とさせていただきたいと思っております。

ありがとうございました。

午後6時22分閉会